

は中央に直径2.8cm、高さ0.6cmで上面が平らな擬宝珠様のつまみを付している。天井部外面は丸味が強く、回転へらけずり調整をしたあとと櫛ナデ調整をしている。天井部と口縁部の境界には二条の極く浅い凹線がある。口縁部は直立に近い傾きで中程は絞り気味になっている。また、口縁端部は丸く仕上げている。

高坏蓋(9) (第45図)

器高(ツマミ欠失) 3.9cm、口縁部径14.2cm。天井部外面のつまみは欠失している。天井部は丸味があり、口縁端部は丸く、少し内傾している。天井部外面は回転へら削りを施し、その他は回転ナデ調整によるものである。

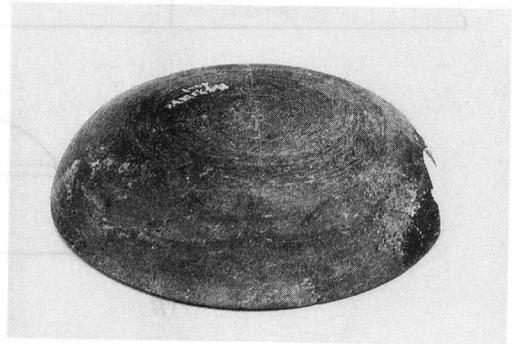


写真91 高坏蓋 (9)

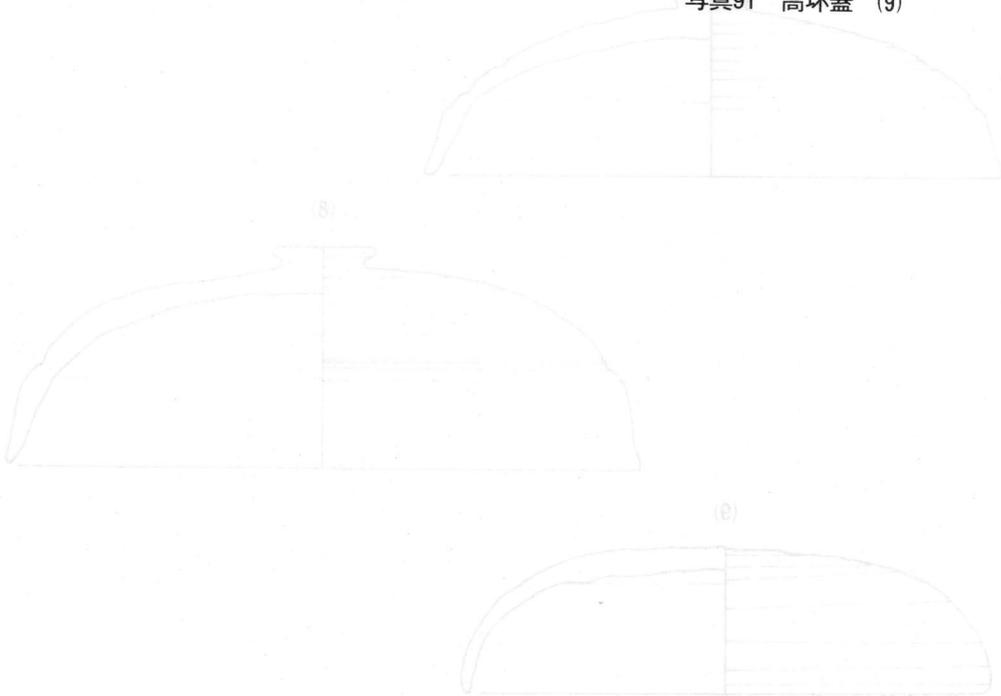
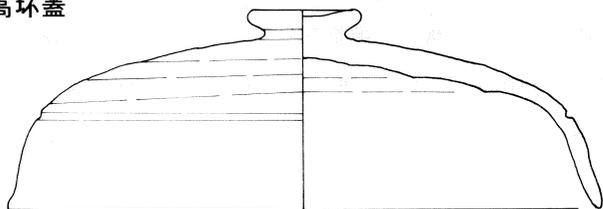


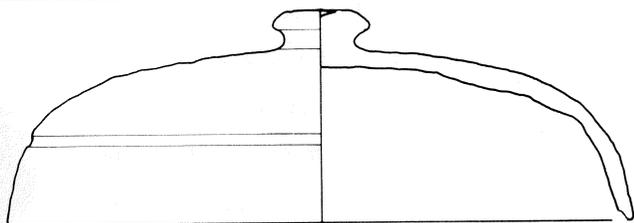
図91

高坏盖

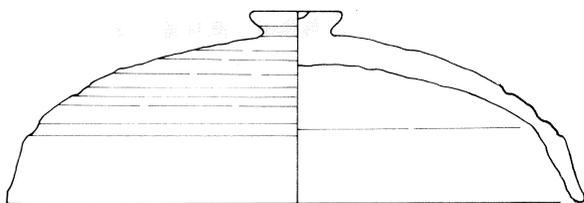
(5)



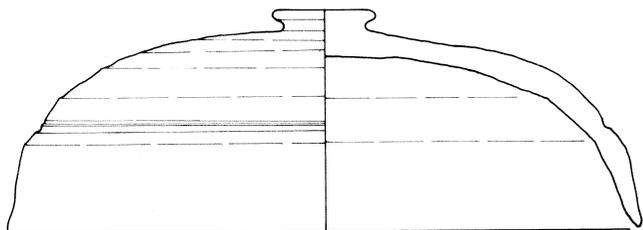
(6)



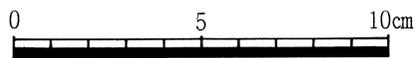
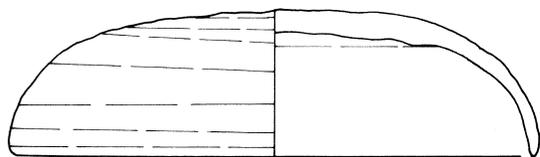
(7)



(8)



(9)



第45图

高坏(1) (第46図)

口縁部径20cm、坏部の深さ3.8cmの無蓋高坏で、坏部は浅く、口縁部は広く、外反し、たちあがりを伴わず、口縁端部は丸く仕上げている。脚部の大半は欠失しているが、間に浅い二条の沈線があり、長方形の透かし窓は二方向に作られている。

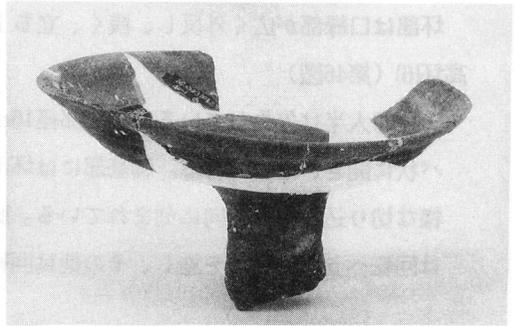


写真92 高坏 (1)

高坏(2) (第46図)

脚底部径17.4cm。また、脚部の間に浅い二条の沈線が認められ、さらにのびた後、ラッパ状に外反し、二方向二段に長方形のスカシ窓が刻まれている。脚部中間に二条、下部に一条の沈線がある。

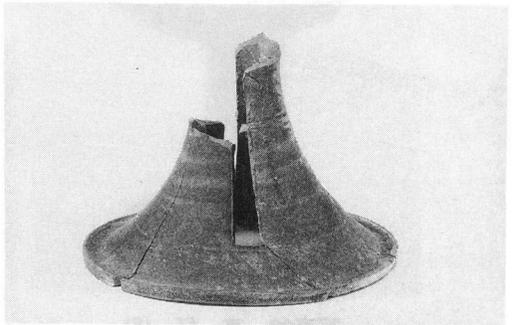


写真93 高坏 (2)

高坏(3) (第46図)

器高20.2cm、口縁部径16.1cm、脚底部径17cmで脚部が縦半分名欠失した有蓋高坏である。立ち上がりの高い有蓋坏そのものに脚部を接続した形態をとり、脚部の間に2条、下部に1条の沈線を施し、長方形のスカシ窓は二方向、二段、直列に刻まれている。



写真94 高坏 (3)

高坏(4) (第46図)

脚部上半分欠失。脚底部径16cm、脚部間に二条の沈線が施され、スカシ窓は二段、直列、三方向に刻まれているほかは前述の(3)と同じである。

高坏(5) (第46図)

器高17.4cm、口縁部15.5cm、脚底部径16.2cm。脚部は基部が比較的太く、下部に一条、中間に二条の沈線があり、長方形のスカシ窓が二段、三方向、直列に刻まれている。

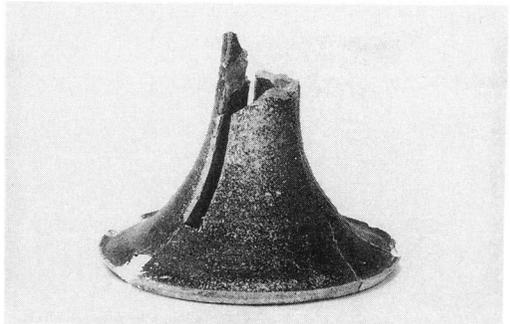


写真95 高坏 (4)

坏部は口縁部が広く外反し、浅く、立ち上がりが比較的高い有蓋坏である。  
高坏(6) (第46図)

坏部大半は欠失している。脚底部径16cm、脚部の高さ6.8cm、脚部は太い脚基部よりラッパ状に開き、短脚である。脚基部には坏部との境界より幅0.1cm、長さ2.5cm程のスカシ窓の様な切り込みを五方向に刻まれている。脚の中程には沈線二条がみられる。坏部外面の上部は回転ヘラ削り調整を施し、その他は回転ハケナデ調整が施されている。



写真96 高坏 (5)

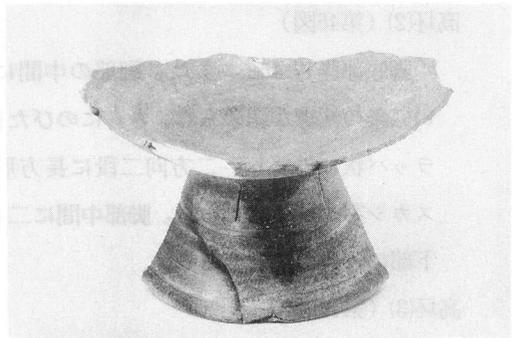


写真97 高坏 (6)

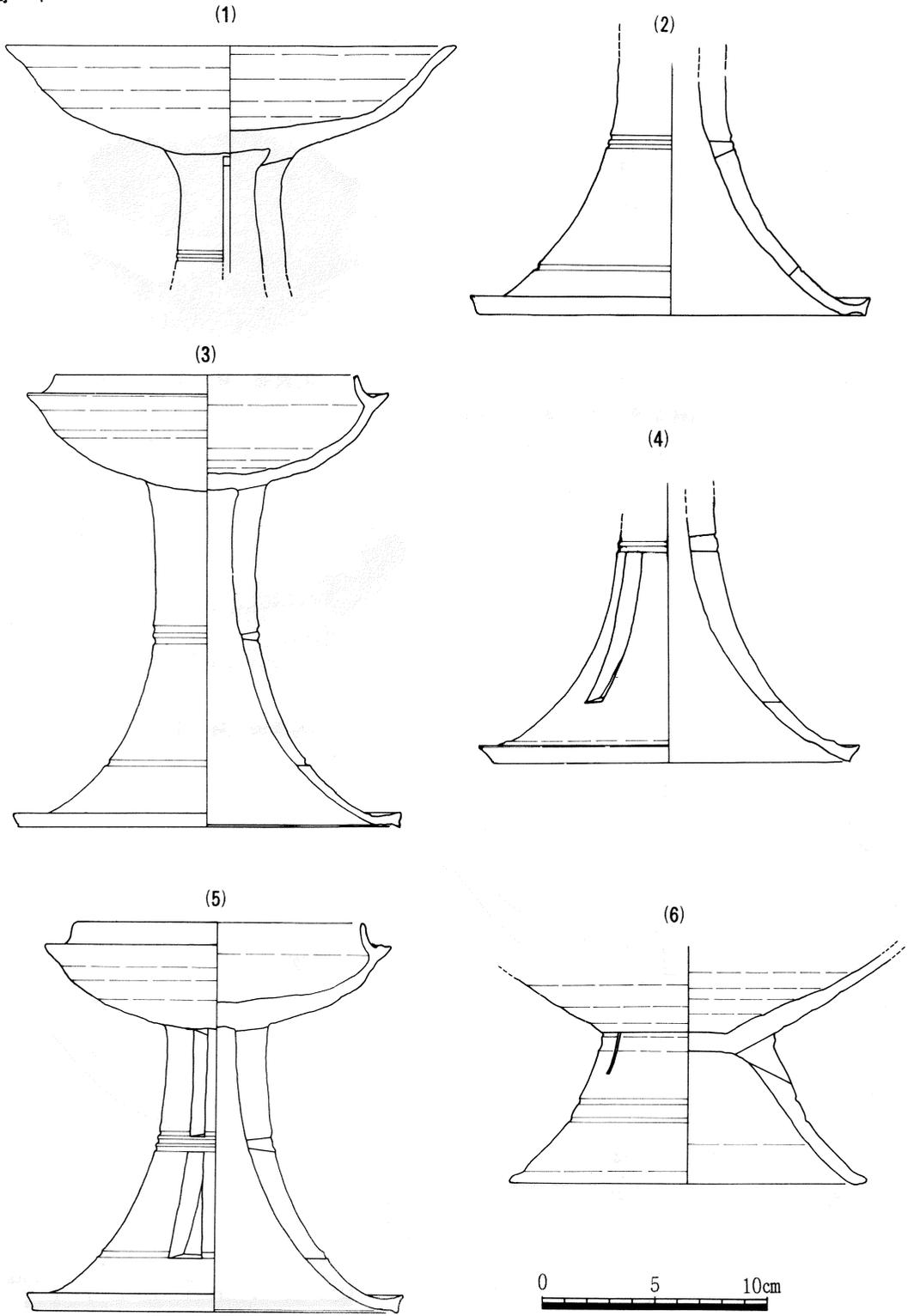


(5) 高坏 40写真



(6) 高坏 40写真

高 坏



第46图

坏(1) (第47図)

器高4.7cm、口縁部径13.6cmで器体部外面は丸味が比較的強く、土粒が多数付着している。たちあがりは内傾し、1cmを測り、端部は丸く仕上げている。

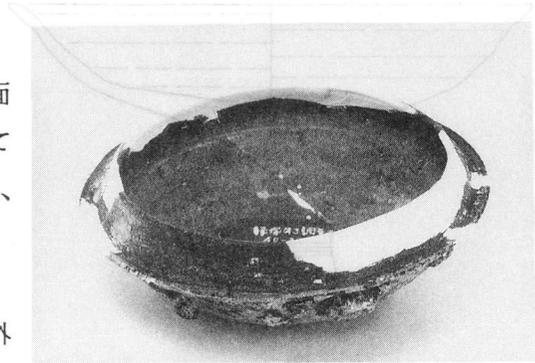


写真98 坏 (1)

坏(2) (第47図)

器高4.2cm、口縁部径14.6cmで器体底部外面はやや扁平となり、回転ヘラ削り調整がなされている。口縁端部、たちあがり端部は共に丸く仕上げられている。たちあがりは外反しつつ内傾している。

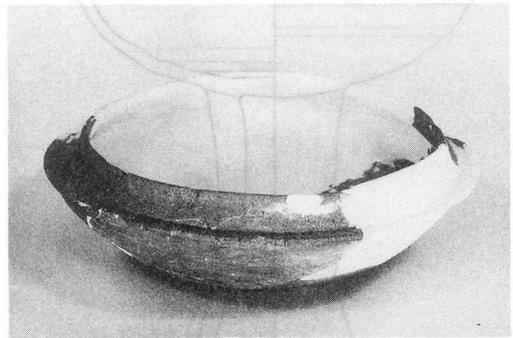
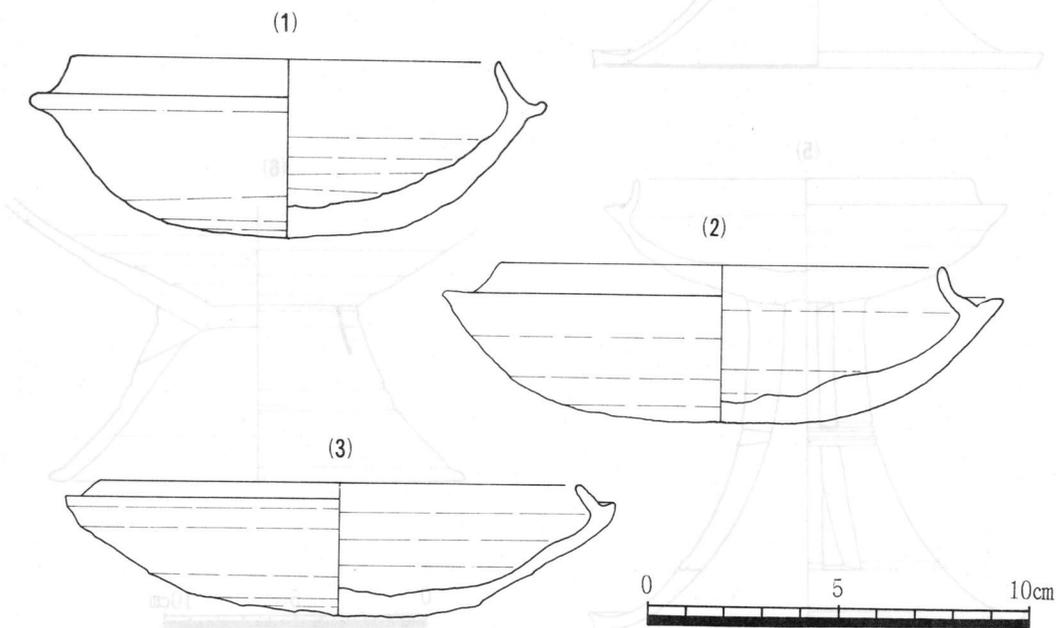


写真99 坏 (2)



第47図 坏

坏(3) (第47図)

器高3.5cm、口縁部径14.5cmで器体底部外面は回転ヘラ削り調整を施し、比較的扁平となっている。口縁の受部は短く、たちあがりは低く、強く内傾し、口縁端部、たちあがり端部は共に丸く仕上げられている。器体全体は手法的に粗雑の感がある。

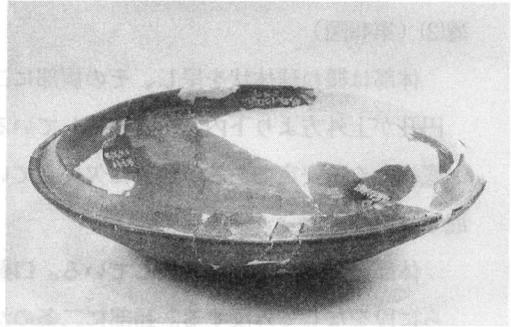


写真100 坏 (3)

鉢 (第48図)

約3分の2強は欠失している。器高約5.5cm、口縁部径約31.4cmで大型の皿状を呈する。器体底部外面は丁寧にヘラミガキ調整が施されている。口縁部はゆっくりと外反し口縁端部は平らで内面に直角に外向きになっている。内面はヘラナデ調整の上、ハケナデ調整が施されている。



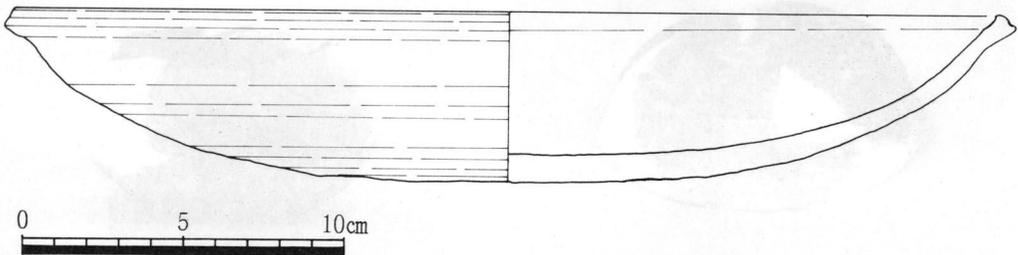
写真101 鉢

甗(1) (第49図)

口頸部は欠失している。体部高約7cm、体部最大径9.9cmで球体より、やや楕円に近い形状を呈し、肩部に沈線一条を巡らし、それに接して上外方より下内方へ径約1.5cmの円孔を穿っている。体部外面の二分の一はヘラ削り調整が施され、底部外面は平らになり安定している。



写真102 甗 (1)



第48図 鉢

甗(2) (第49図)

体部は概ね球体状を呈し、その肩部に二条の沈線を巡らし、それに接して直径1.6cm程の円孔が上外方より下内方へと穿孔している。体底部三分の二はへら削り調整を施しているが底は丸く不安定である。頸部は欠失している。

甗(3) (第49図)

体部、頸部の一部が欠失している。口頸部は基部が細く、ラッパ状に外反し、頸端部でさらに段をなして外反する。頸部に二条の沈線が施されている。口縁端部は平らで内傾している。頸部より口縁端部の間に櫛状へらによる掻き文が施されている。

短頸甗蓋 (第49図)

器高2.9cm、口縁部径8.0cmと小型である。天井部外面の三分の二程はへら削りが施され、端部は僅かに段をなして内傾している。つまみは伴わない。玄室内より出土。

短頸甗 (第49図)

頸部が欠失しているので器高の計測は不能である。器体部最大径9.7cmと小型である。底部はへら削りを施し、安定している。肩部は張りが強く、稜を感じる。頸部は残存する極く一部から直立していたと推考される。

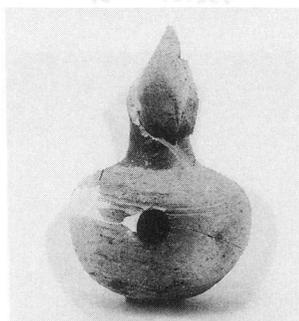


写真103 甗 (2)



写真104 甗 (3)



写真105 短頸甗蓋

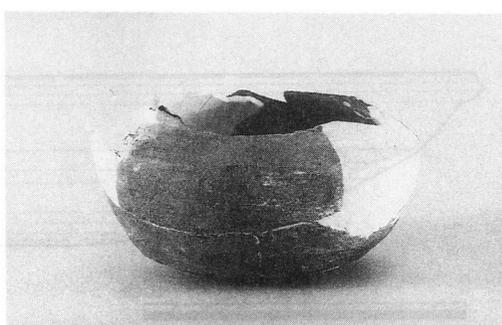
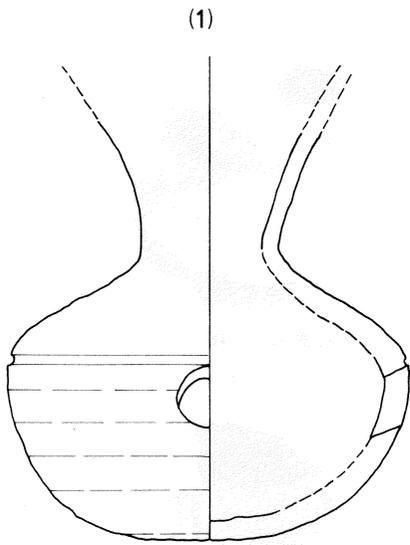
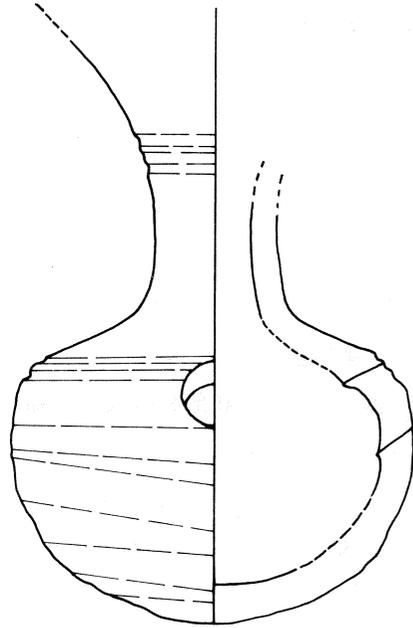


写真106 短頸甗

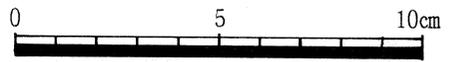
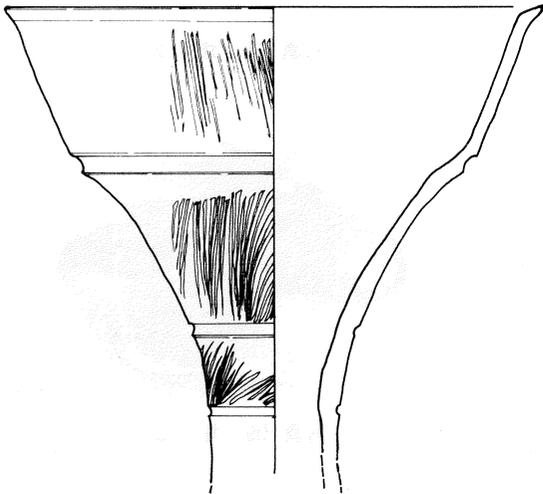
壺



(2)

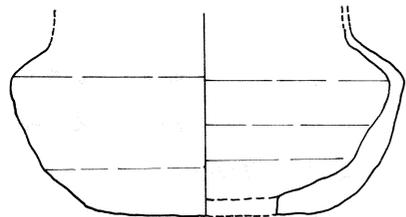
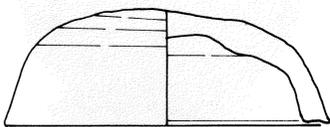


(3)



短頸罇

短頸罇蓋



第49図

埴(1) (第50図)

器高6.5cm、口頸部高2.0cm、口頸部径6.8cm、体部最大径9.6cm。

口頸部は直立し、端部は丸く仕上げている。底部は丸く安定を欠く。肩に張りがあり、上部に一条の沈線が施されている無蓋埴である。玄室内より出土。



写真107 埴 (1)

埴(2) (第50図)

器高7.4cm、口頸部高2.8cm、口頸部径7.7cm、体部最大径10.6cm。

口頸部はやや長く、直立気味にのびており、端部は丸く仕上げられている。底部はへら削りを施し、やや平らで安定している。体部の肩には張りがあり、わずかに稜の如き角度を有する無蓋埴である。玄室内より出土。

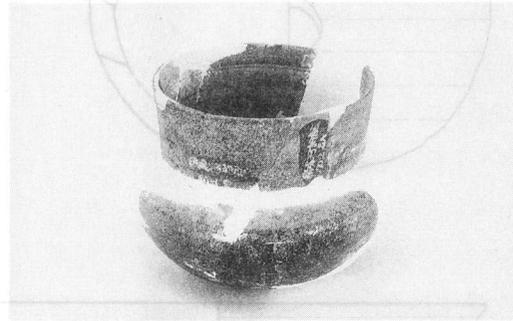


写真108 埴 (2)

埴(3) (第50図)

器高7.9cm、口頸部高1.3cm、口頸部径6.6cm、体部最大径14.5cm。

頸部短く、体部は扁平で楕円に近く、底部はへら削りが施され平らで安定している。有蓋埴と推定される。羨道より出土。

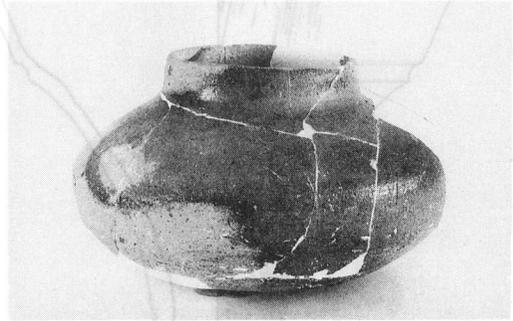


写真109 埴 (3)

埴(4) (第50図)

器高8.5cm、口頸部高1.3cm、口頸部径6.6cm、体部最大径11.7cm。

頸部短く直立気味にのび、体部は肩に張りがあり稜を感じる。底部はへら削り調整が施され、その他はナデ調整により丁寧に仕上げられた有蓋埴である。羨道より出土。



写真110 埴 (4)

有蓋埴(1) (第50図)

蓋は高さ4.4cm、口縁部径8.4cmを測る。

天井部外面は丸味をもち丁寧にへら削り調整を施し、中央部に径1.8cm、高さ0.9cmの擬宝珠様のつまみを付している。口縁部は直下気味で端部内部は僅かに段を有し、内傾している。

罎は高さ7.2cm、口頸部径6.2cm、体部最大径11.0cm。口頸部は高さ0.9cmと短く直立し、体部は肩が強く張り稜を有する。底部はへら削り調整により丸く仕上げているが安定している。羨道前半部より出土。



写真111 有蓋罎 (1)

有蓋罎(2) (第50図)

蓋は高さ3.3cm、口縁部径8.0cmを測り、天井部外面は丸味をもち、丁寧にへら削り調整を施し、中央部には頂部に僅かな凹面をもつ高さ0.7cm、径1.2cmの擬宝珠様のつまみを伴う。口縁部外面は、やや直下気味で端部で角度をもって外反し、端部内面は平らで内傾している。

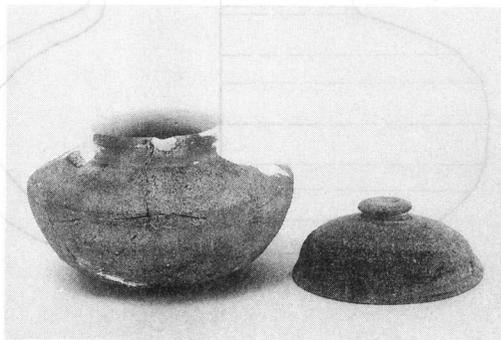
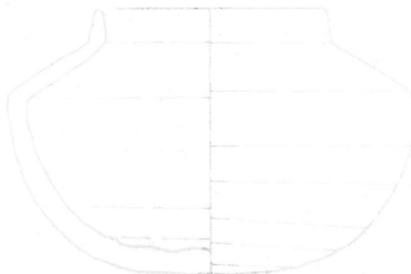
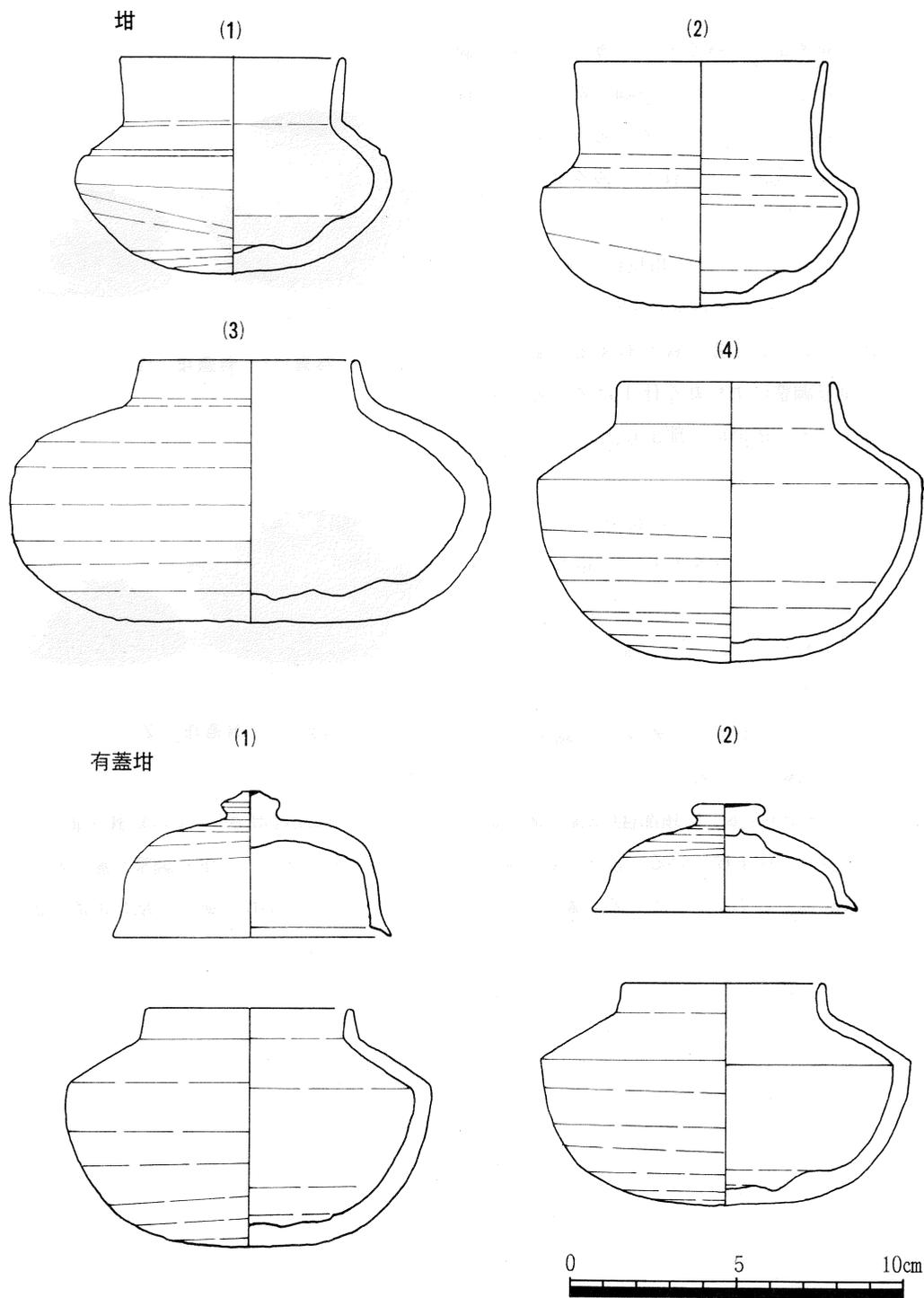


写真112 有蓋罎 (2)

罎は高さ6.7cm、口頸部径6.2cm、体部最大径11.2cm。口頸部は高さ0.9cmの短頸で直立し、端部は丸く仕上げている。器体は肩が強く張り稜を有する。底部へら削り調整が施されている。底は平らで安定している。蓋とともに玄室内より出土したが罎の破片一部は羨道内より出土した。





第50图

有蓋埴(3) (第51図)

蓋は高さ4.3cm、口縁部径8.4cmを測り、天井部外面はへら削り調整が施され緩やかな丸味を有し、中央部には頂部に僅かな凹面をもつ高さが0.8cm、径2.2cmの擬宝珠様のつまみを伴う。口縁部は直下気味にのび、端部は概ね平らで内傾している。羨道部より出土。

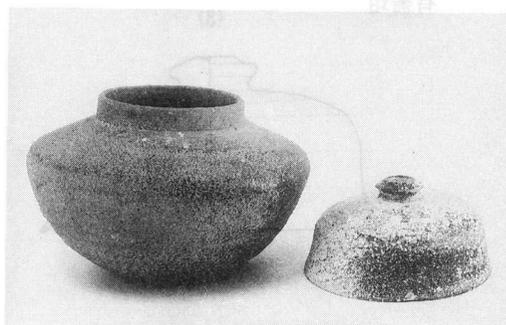


写真113 有蓋埴 (3)

埴は高さ8.0cm、口頸部径6.3cm、体部最大径12.3cm。口頸部は高さ1cmでほぼ直立しており、端部は丸く仕上げている。体部は肩に強い張りがあり、稜は認められないが丸味が急である。ナデ調整により丁寧に仕上げている。体底部はへら削りの後ナデ調整が施されているが、最低部はへら削り未調整の感がある。羨道部より出土。

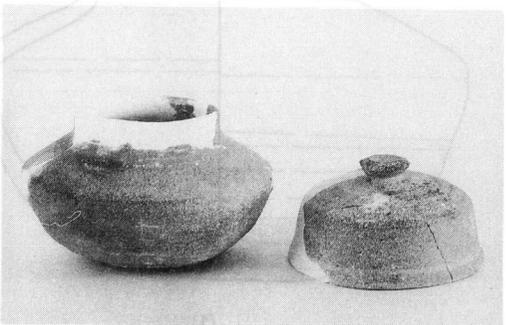


写真114 有蓋埴 (4)

有蓋埴(4) (第51図)

蓋は高さ4.4cm、口縁部径8.5cmを測り、天井部は緩やかな丸みをもち、中央部には頂部に浅い凹面をもつ高さ0.8cm、径1.2cmの擬宝珠様のつまみを伴う。口縁部は直下し、端部はわずかに段を有し、内傾する。

埴は高さ6.7cm、口頸部径6.2cm、体部最大径10.8cm。口頸部は高さ1.0cmでほぼ直立し、端部は丸く仕上げている。器体部は肩に強い張りがあり、底部はへら削り調整により丸く仕上げられている。

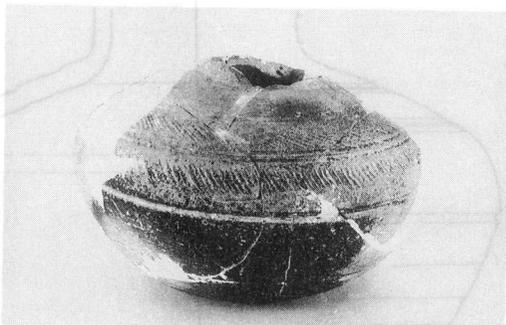


写真115 壺

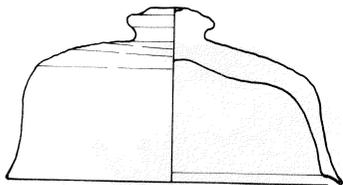
全体的に丁寧に仕上げている。

壺 (第51図)

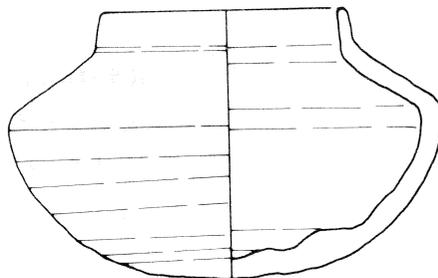
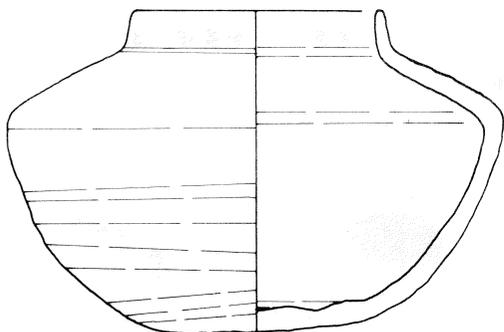
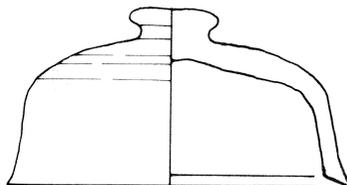
口頸部が極く一部残存する程度で口縁端部欠失のため器高は測定不能である。口頸基部は直立している。器体は肩に張りがあり、二条の沈線が施され、その上部1.5cmのところにも二条の沈線、その間に文様帯がある。また、肩部の二条の沈線とその下2cmのところの一条の沈線の間に文様帯がある。文様帯はいずれも斜め方向へのカキ目文様である。底部中位にも一条の沈線が施されている。体底部は丁寧にへら削り調整が施されている。玄室より出土。

有蓋罍

(3)

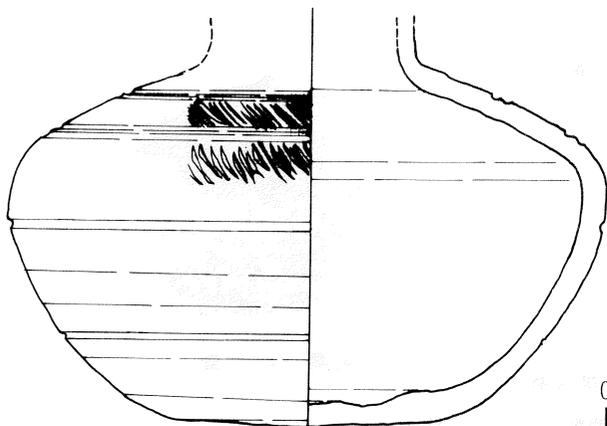


(4)



(1)

壺



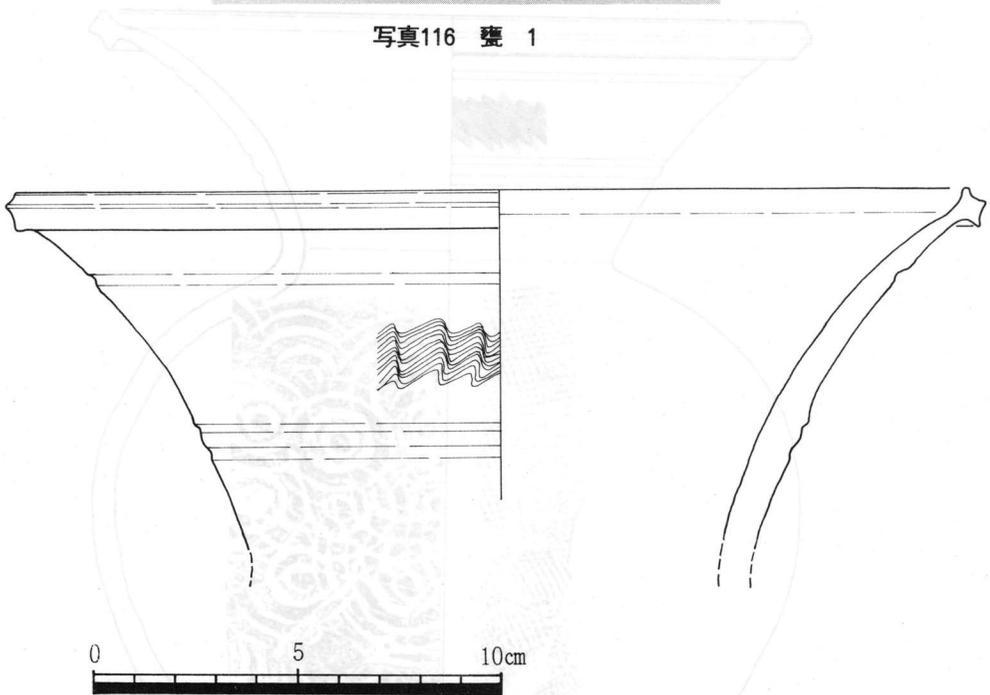
第51图

甕(1) (第52図)

体部欠失。口縁部の径は24.1cmで口頸部は緩やかに外反し、端部は屈曲させて断面が方形に肥厚している。口頸部外面の中程には波状の文様帯があり、その上部に一条、下部に二条の沈線が巡らされている。玄室内の西部より出土。



写真116 甕 1



第52図 甕 (1)

甕(2) (第53図)

器高28.8cm、口縁部の径23.1cm、器体最大径23.6cmを測り、口頸部は緩やかに外反し、端部は肥厚し、断面は方形をなし、緩やかな波状を呈している。口頸部外面の中位には波状文が接して並んだ文様帯が施され、その上方に一条、下方に二条の沈線を施している。器体部はほぼ球体をなし、内

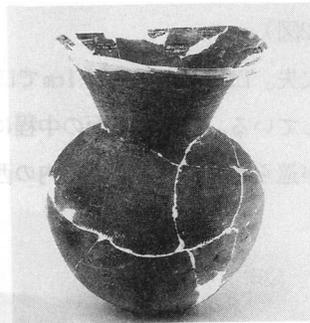
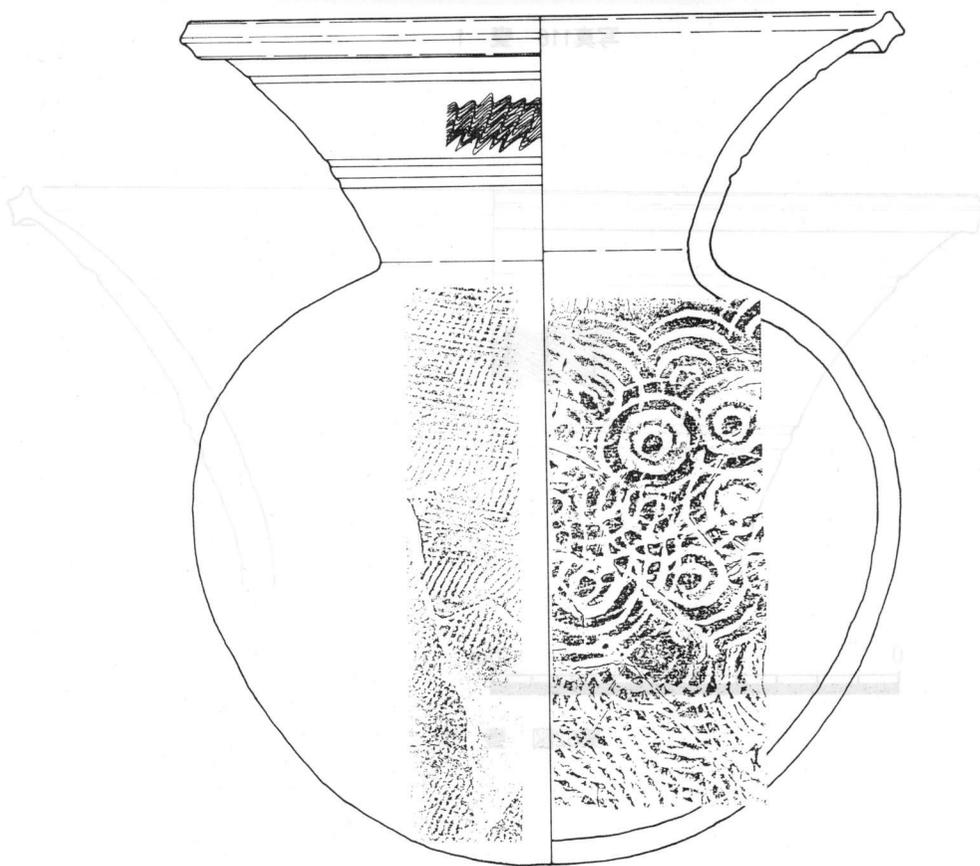


写真117 甕 2

面には同心円叩き文が施され、外面には並行叩きの後、並行カキ目調整を施している。肩に張りはみられず、底は丸く安定性に欠ける。玄室の中央部西よりから出土。



第53図 甕 (2)

甕(3) (第54図)

器高33.0cm、口縁部の径21.3cm、器体最大径29.0cmを測り、口頸部は緩やかに外反し、端部は肥厚し、断面は方形をなし、一部に歪みがある。頸部外面の基部には二条の沈線を施し、その上部にツメカキ文様帯があり、文様帯と口縁端部の間は回転カキメ調整が施されている。器体部は肩の張りは殆ど認められず、ほぼ球体をなし、外面は格子叩きの後、上部にカキ目調整を施し、内面は同心円・円弧叩き文を施している。底部は丸く不安定である。玄室中央部より出土。



写真118 甕 3

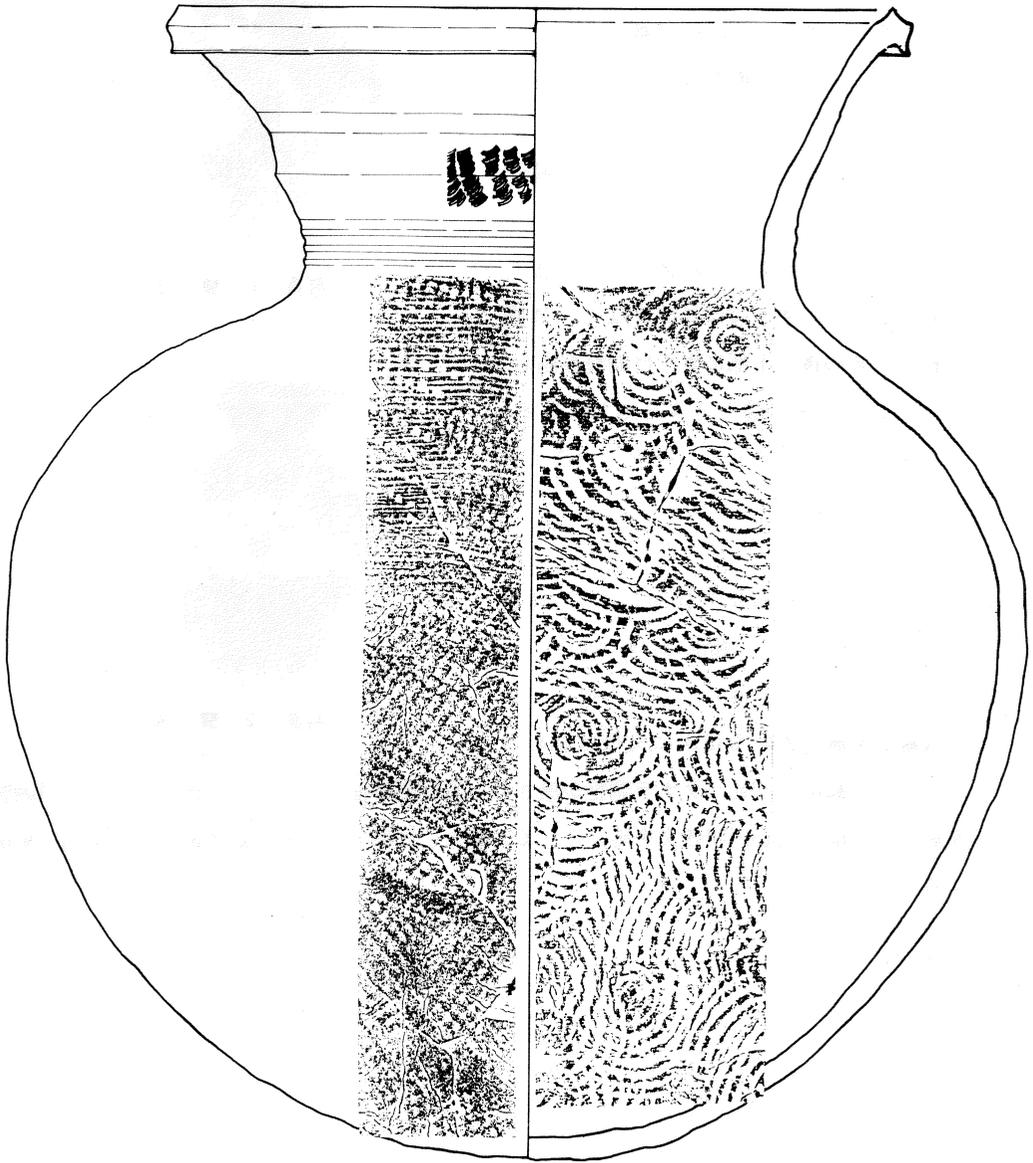


写真119 甕 4

甕(4) (第55図)

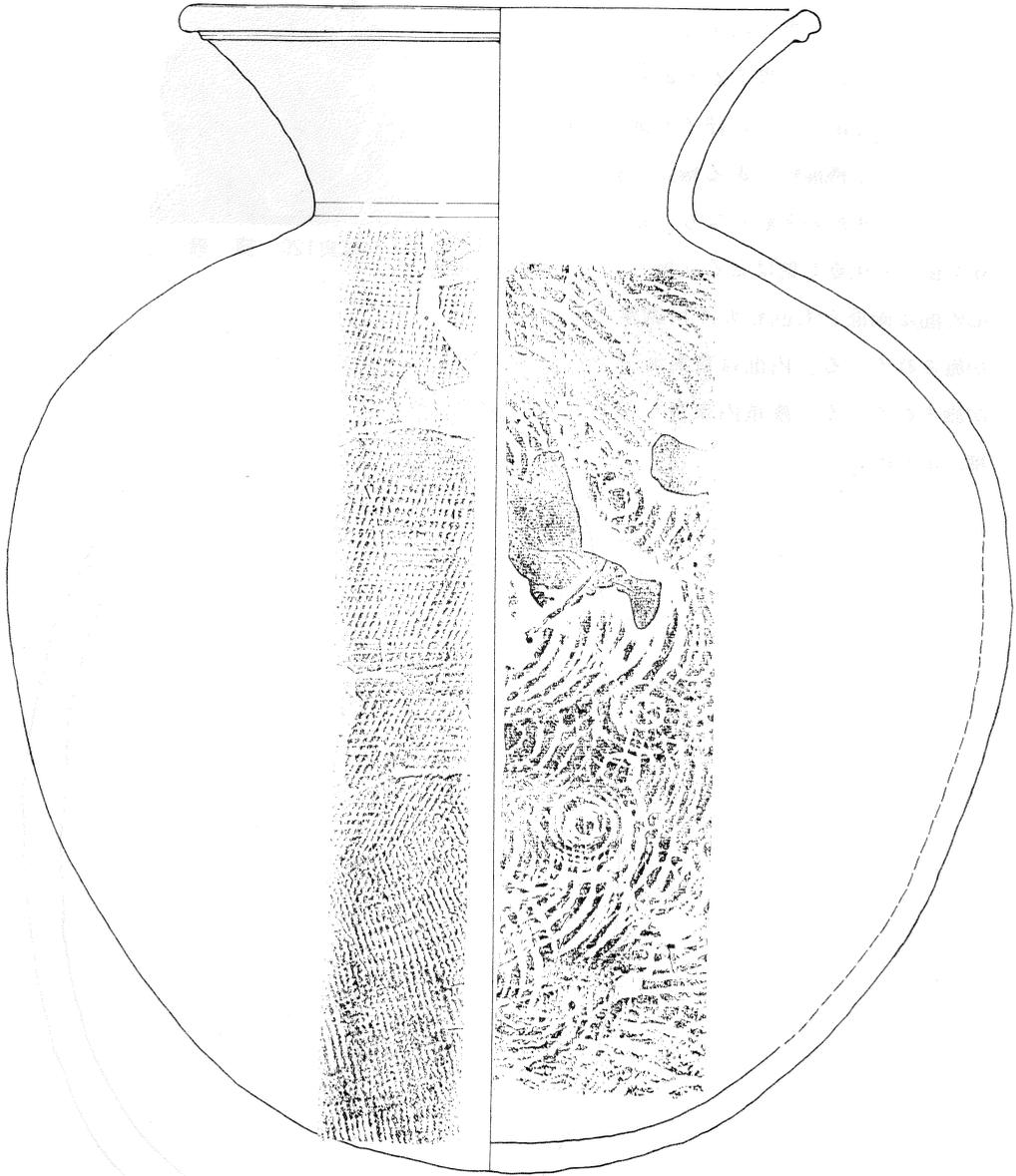
器高37.5cm、口縁部の径20.5cm、器体最大径32.0cmを測る。口頸部は比較的短くラッパ状に外反し、端部は丸く、外下側に一条の隆線文を施しているほかに文様は認められない。口頸部は回転ハケナデ調整が施され、器体部外面は並行叩きの後上半にカキ目調整を施し、内面は同心円叩き文を施している。また、底部は丸く不安定である。玄室内の東部より出土。





0 5 10cm

第54図 甕 (3)



0 5 10cm

第55図 甕 (4)

提瓶（第56図）

口頸部は欠失している。器体最大径29.0 cmを測る比較的大型の扁平な円球形に口頸部を付した所謂水筒型土器である。器体部の上面・口頸部の左右に紐でも通して釣り上げるような機能性のある輪状の把手は退化して、カギ形の突起となり、かろうじて紐を掛ける用途を偲ばせる状態である。体部外面は両面とも回転カキ目調整が施されている。内面は青海波文が施されている。羨道内東寄りの地点より出土。

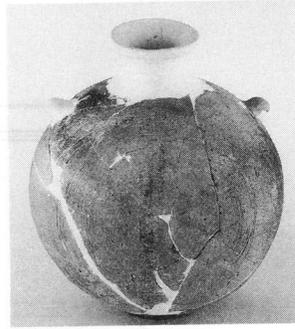
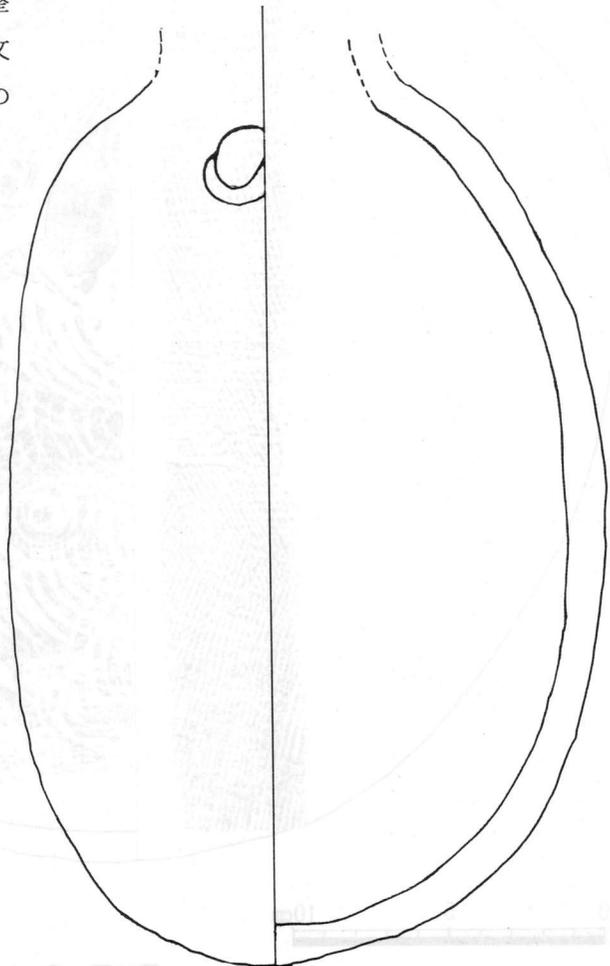


写真120 提瓶

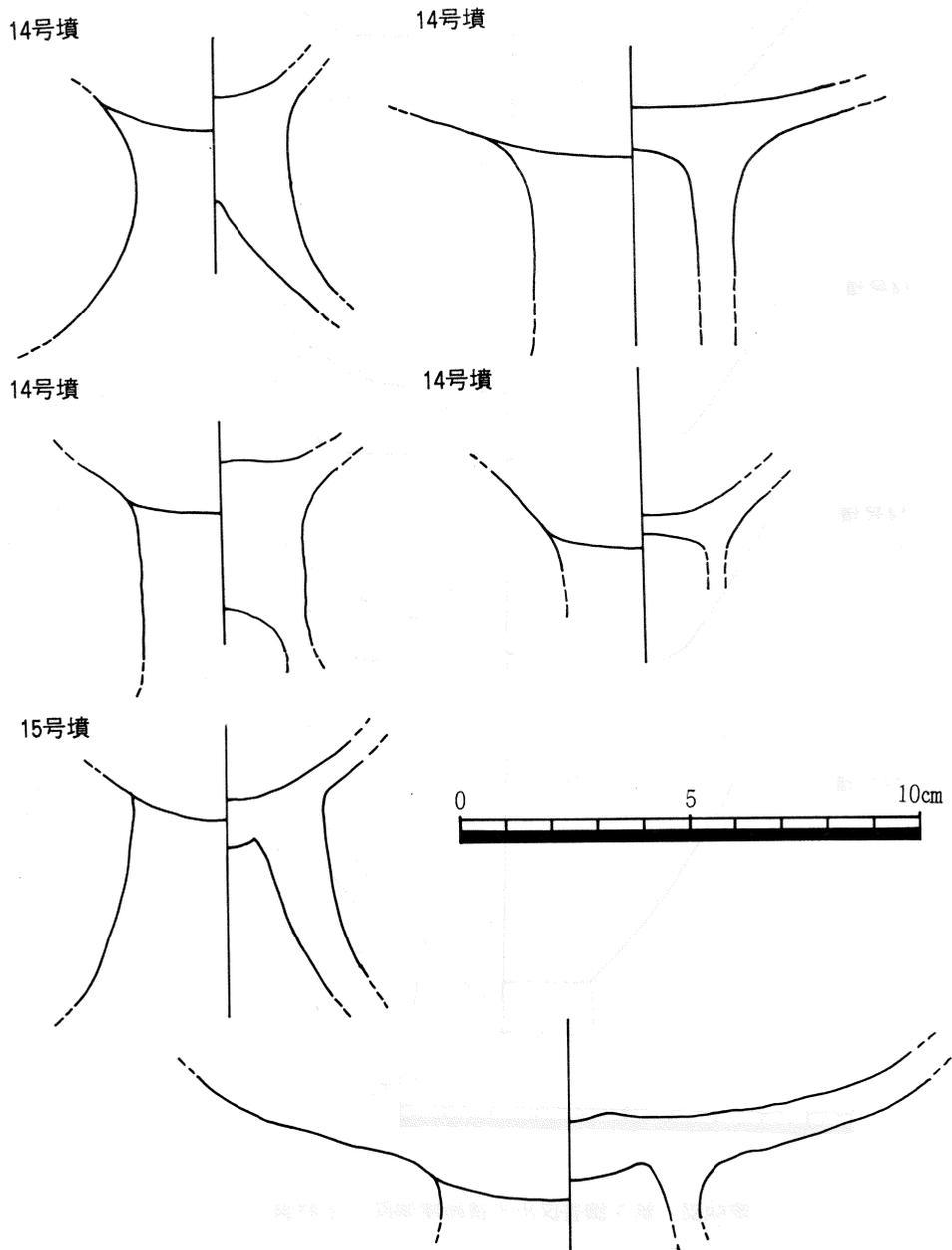


第56図 提瓶

土師器

① 高坏の基部6点を検出した。

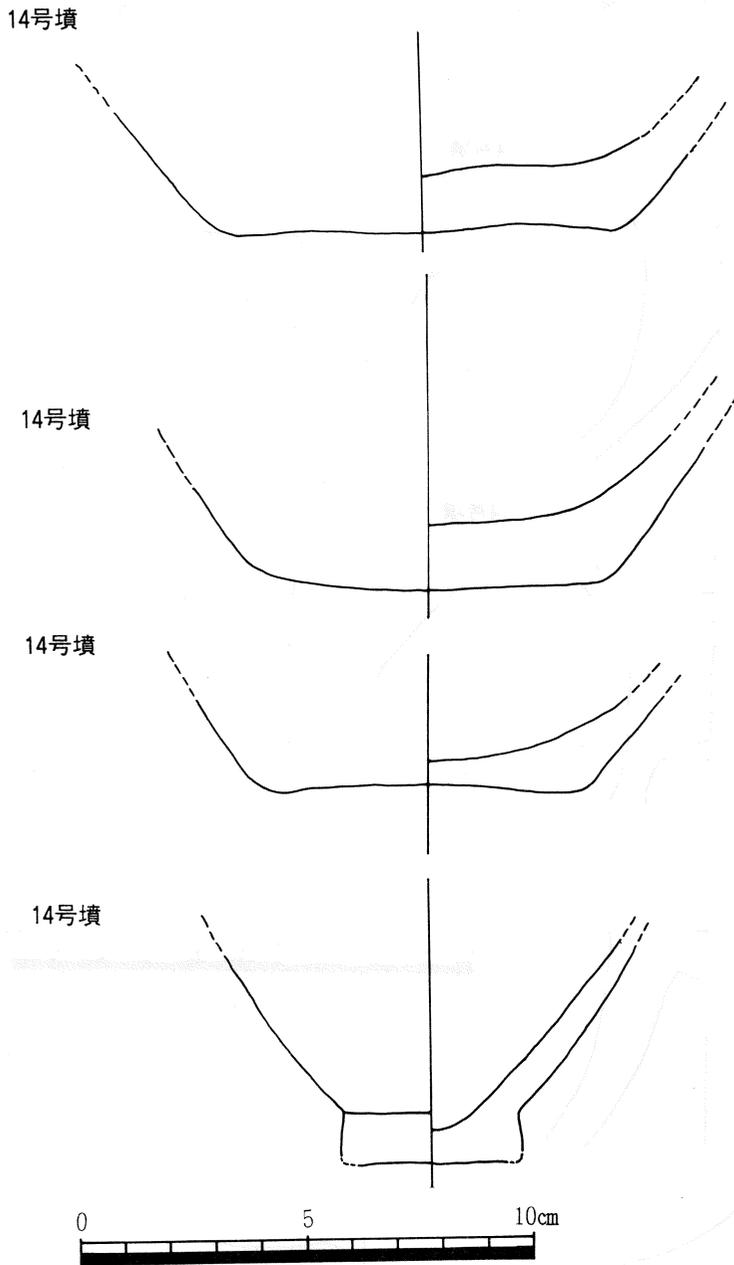
(第57図)



第57図 第3調査区出土遺物実測図(土師器)

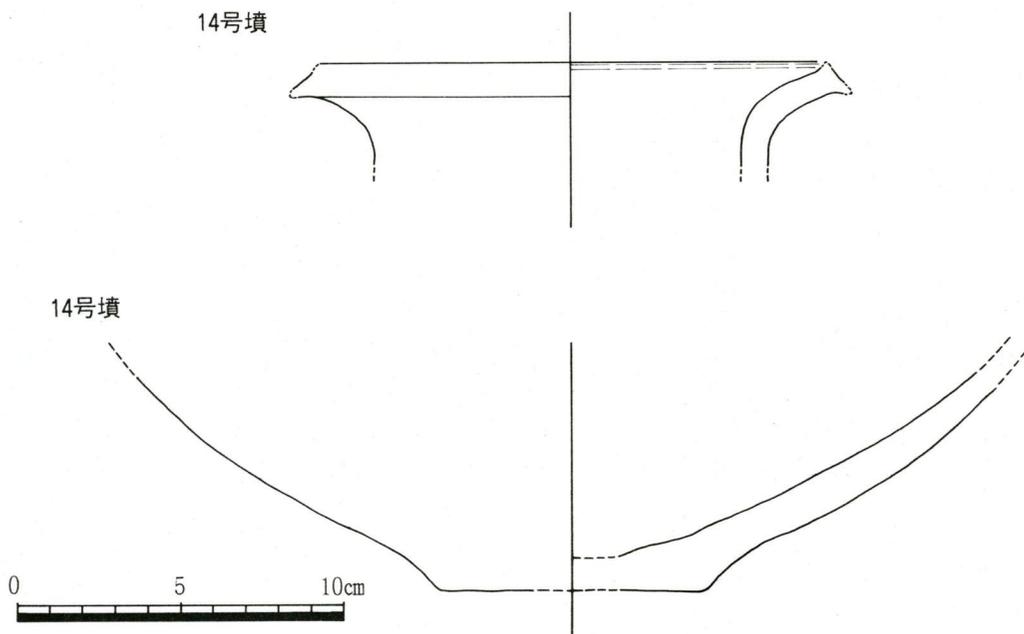
② 壺の底部と思われるもの4点検出した。

(第58図)



第58図 第3調査区出土遺物実測図(土師器)

③ 壺の底部と口縁部と思われるものそれぞれ1点検出した。 (第59図)



第59図 第3調査区出土遺物実測図 (土師器)

(7) 15号墳 (第60図)

標高62.75m、1号墳の北北西約90m、14号墳の北西50mの位置で検出。削平による破壊著しく、僅かに残存する周濠を検出した。精査したものの主体部は検出できなかった。北東部の周濠内より須恵器片、北西部の攪乱された土層の上層より須恵器1を検出した。15号墳は直径7.5mの周濠をめぐる円墳と推考する。

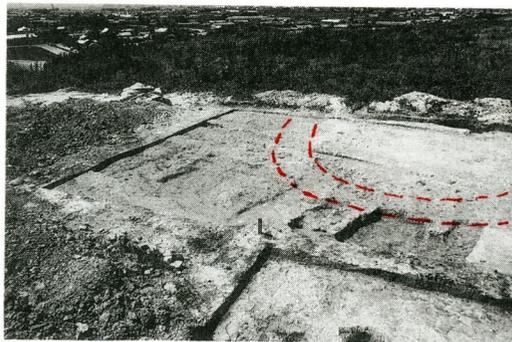
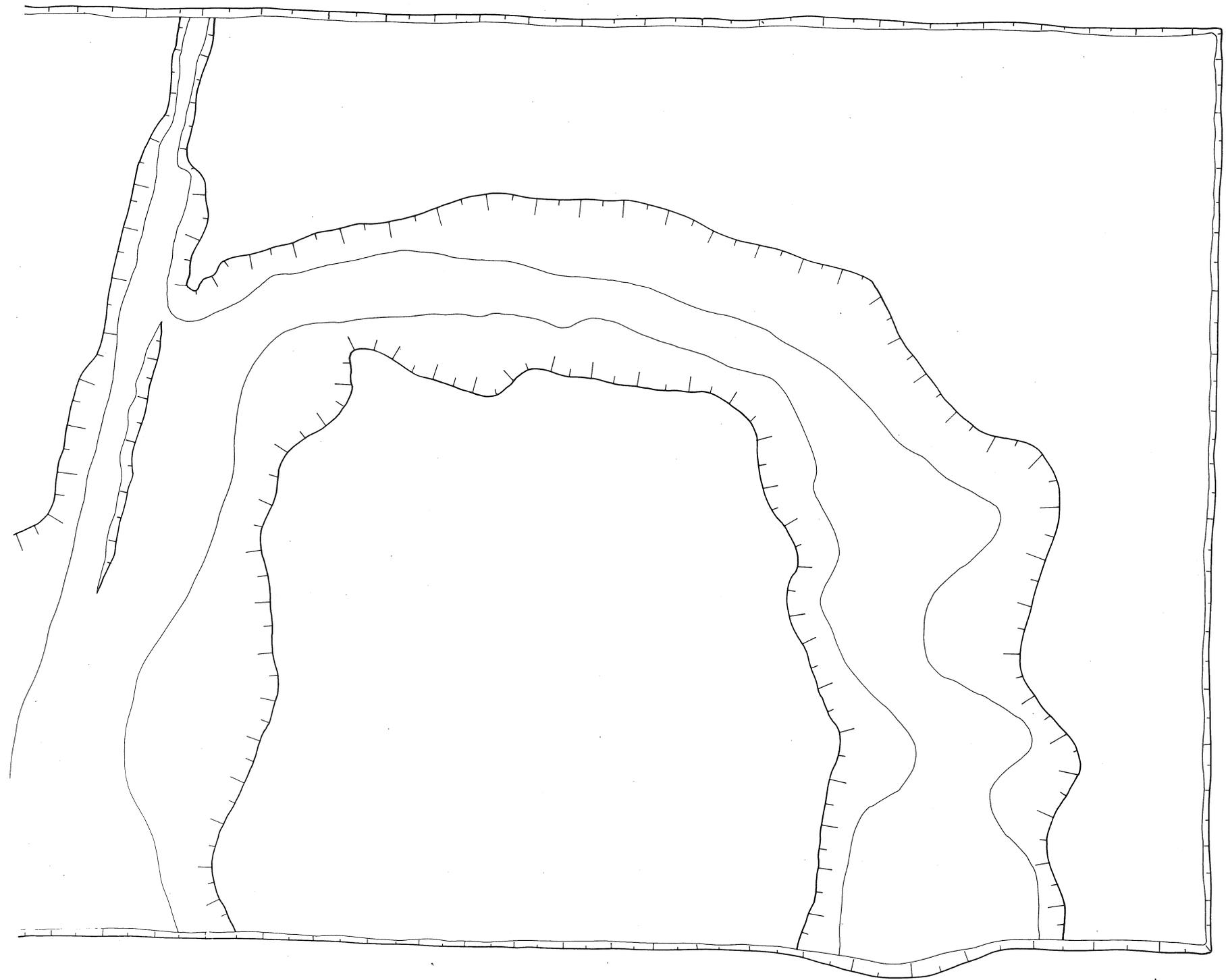


写真121 15号墳周濠



第60图 15号墳実測図

## 出土品について

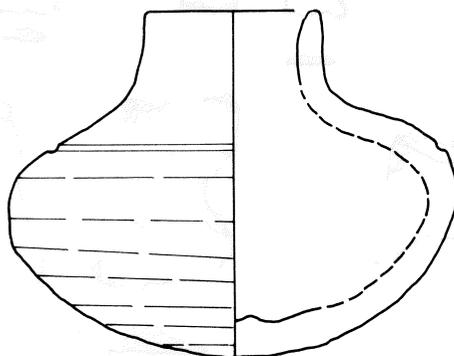
### 短頸小罎（第61図）

器高6.2cm、器体最大径8.0cm、口縁部径3.2cmの小で、頸部は直立し、口縁端部は丸い。器体部は肩の張りが強く、丸みがあるものの稜を感ずるほどの角度をもち、肩の上辺に一条の沈線を施している。底部は丸くへら削り調整している。周濠の北西部より出土。

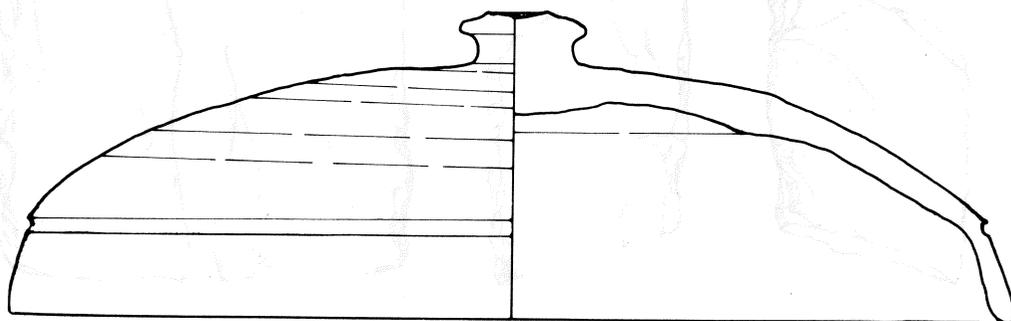
### 高坏蓋（第61図）

器高5.5cm、口縁部径18.1cm、天井部外面は回転へら削りが施され、丸みを有し、中央部には直径2.3cm、高さ0.9cmで頂部に凹面を有する擬宝珠様のつまみを付している。天井部と口縁部の境界には一条の沈線を施され、僅かに稜も感じる。口縁部は高さ1.6cmで回転ナデ調整を施し、端部は丸く仕上げている。

短頸小罎



高坏蓋



第61図



写真122 短頸小罎

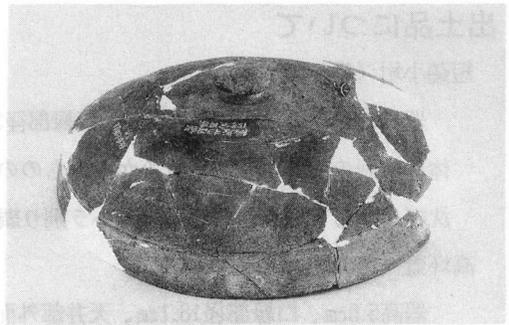
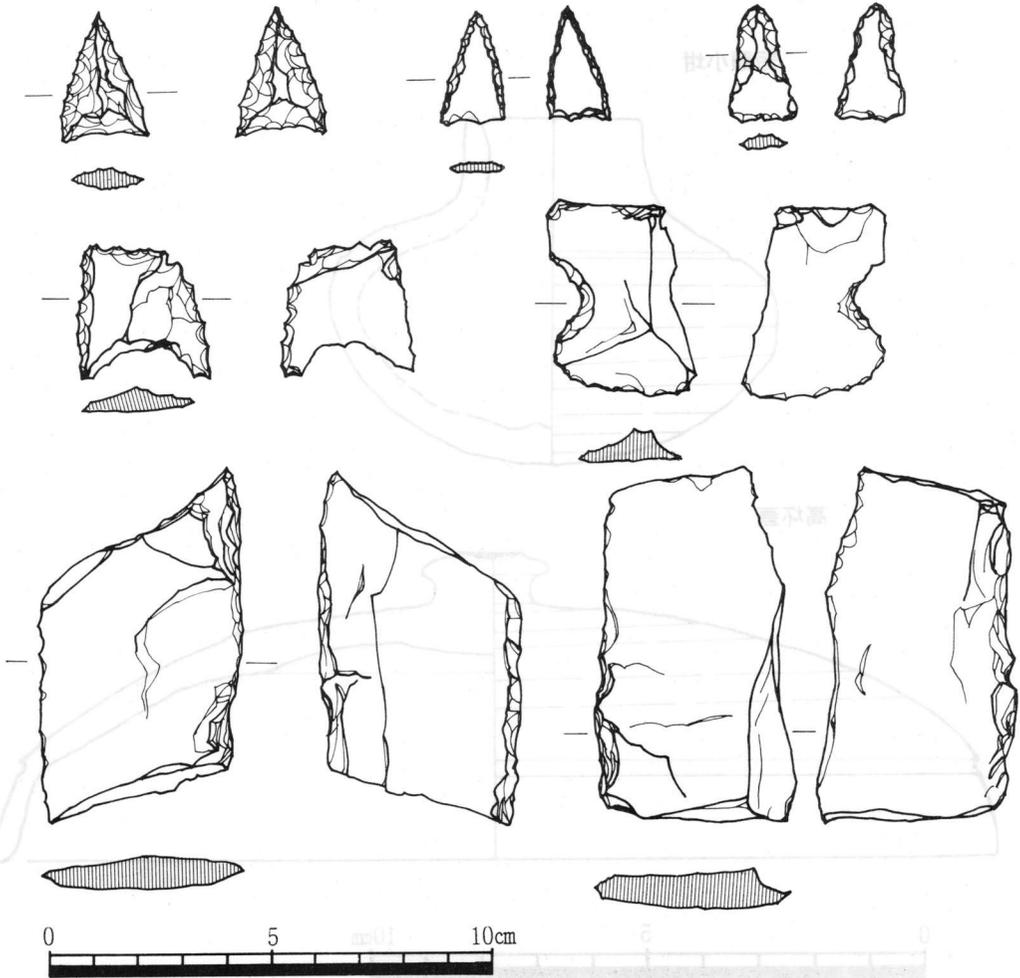


写真123 高坏蓋

石製品 (第62図)

第3調査区でサヌカイト片を多数検出した中で、製品としては石鏃4点、石包丁3点であった。



第62図 第3調査区出土遺物実測図 (石製品)

## む す び

雲辺寺山の北面する麓、標高60mあまりの三度笠風の互いに接続する3つの丘陵にまたがる縁塚遺跡のうち、中と南の丘陵に散在する遺跡の調査を実施した。中の丘陵を第2調査区、南の丘陵を第3調査区として進めていった。

両調査区の東側と西側の麓には標高40m程の平坦地に続いて、大池川（柞田川支流）、柞田川が流れている。また、当調査区は共に開墾時に削平され、遺跡は甚だしく破壊されているものの、柱穴、サヌカイト片、サヌカイト製品（石鏃、石包丁など）、弥生式土器片、木炭片を若干検出した。これらから、弥生時代から人が住み着き、川の流域で水田が耕作され、この丘陵には、住居、倉など掘立建物を構えて集団で生活していたものと推考される。

第2調査区からは7号墳、12号墳、第3調査区からは1号墳、2号墳、3号墳、4号墳、13号墳、14号墳、15号墳を確認・検出した。これらの遺構はいずれも、眼下に居住地域、水田耕作地域を見晴らせる標高60m余りの丘陵上に占地し、墓所として高からず、低からず格好の場所という感じである。これらの遺構の特色、共通点として、

①開口方向は、まちまちであるが両袖式の横穴式古墳である。

②石室の床は、2層構造の礫床である。（14号墳を除く。）

下層に平板状の川原石を平に敷き詰め、上層に砂礫を敷き詰めて礫床を形成している。

③床には扁平な川原石で蓋をしたV字型の排水溝を設けている。

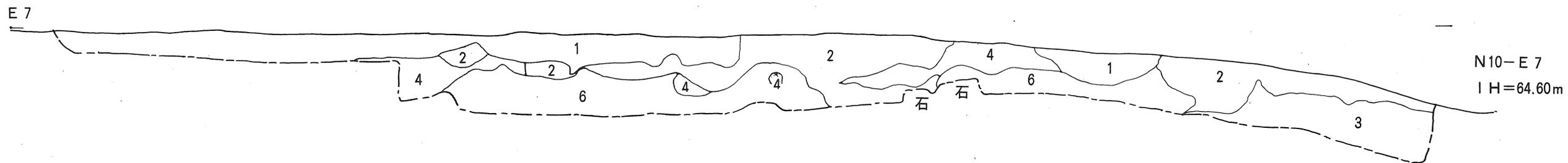
④構築にはすべて地元の資材（粘土、川原石、砂礫など）を活用している。

⑤周濠をめぐらした円墳である。

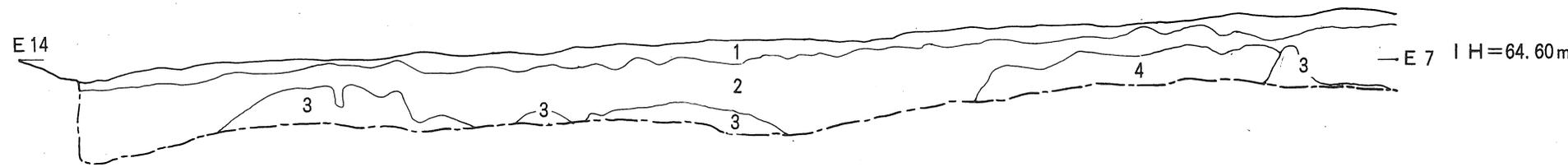
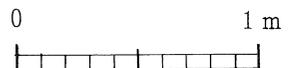
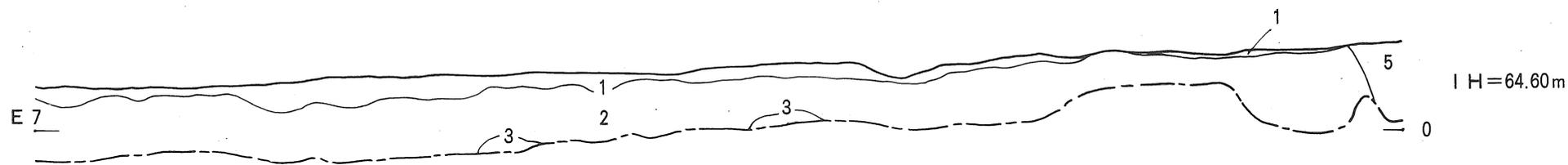
などが挙げられ、いずれも6世紀後半の構築と考えられる。

第3調査区の1号墳、2号墳、4号墳、14号墳では、羨門の外で稲藁を焚いた灰層を確認し、さらに14号墳では、墓前（閉塞石の外）から高環、環、埴など（42図）を検出し、墓前祭が営まれたことを確認した。

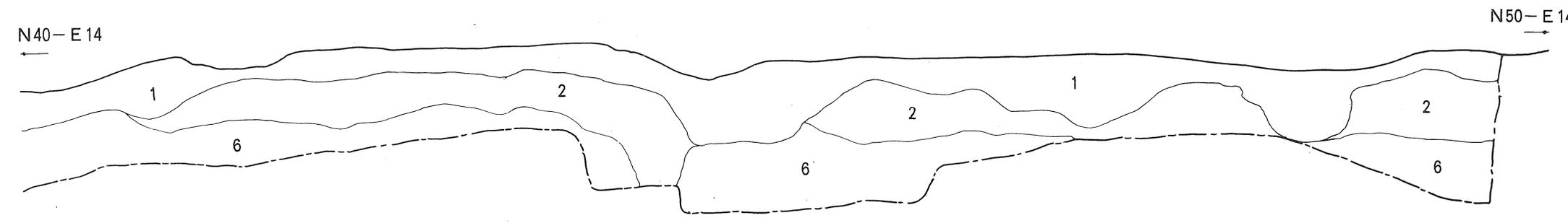
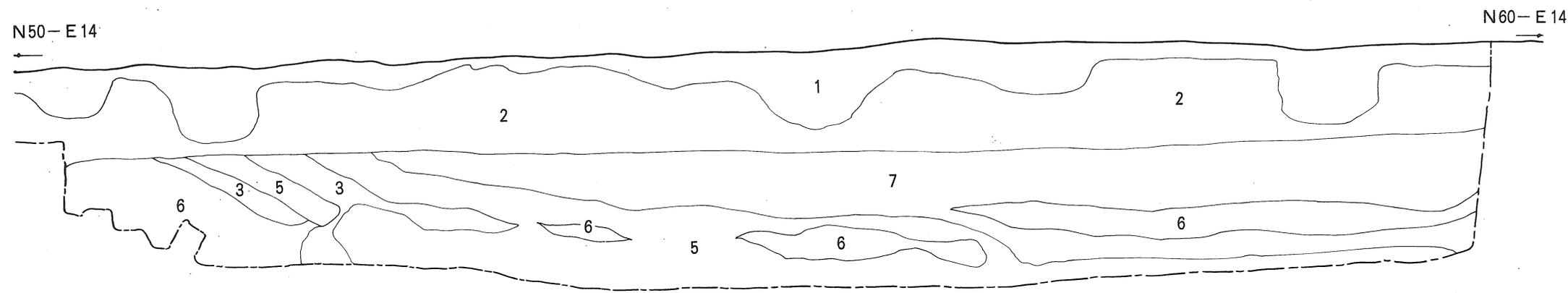
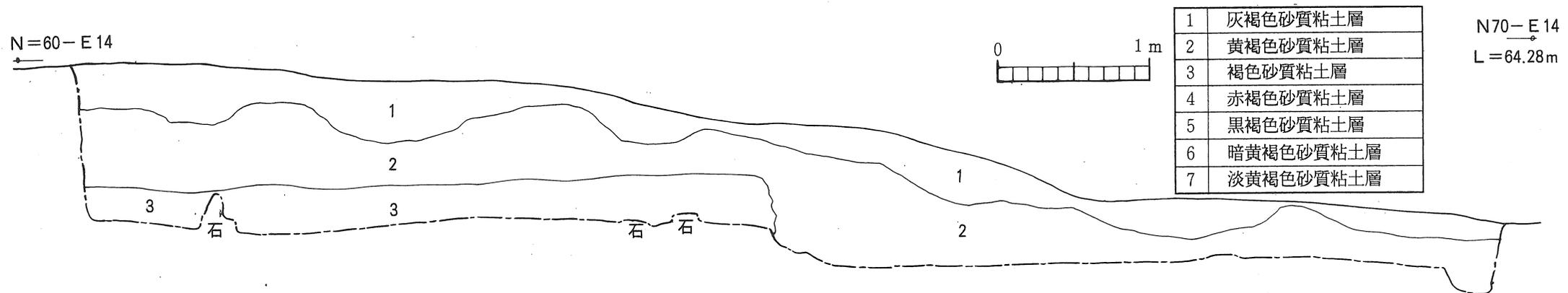
4号墳の規模は当古墳群中最も大きく、古老の話では、カンス塚と呼ばれ、開墾時に金環が出土したと云う。これらと立地点から、この集団の首長の墳墓と推考する。また、平塚、角塚、椀貸塚、延命古墳などに続く大規模な6世紀後半の古墳である。



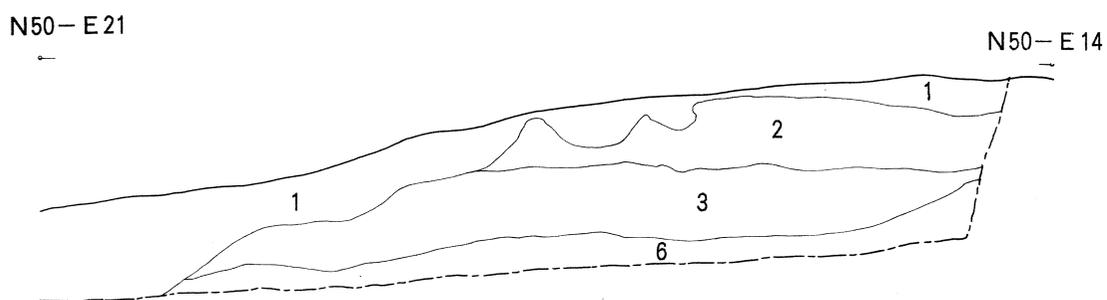
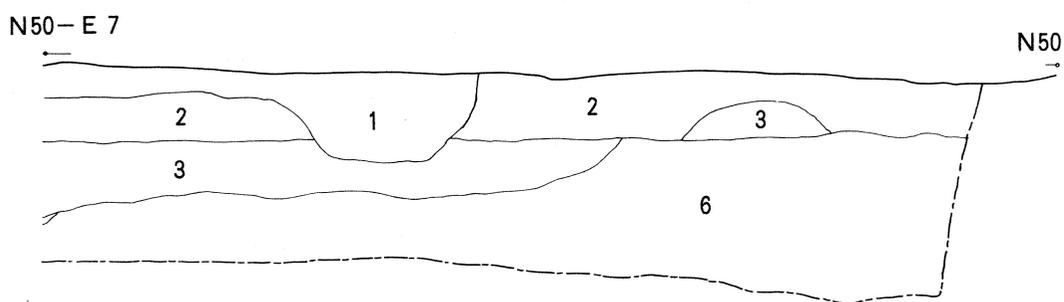
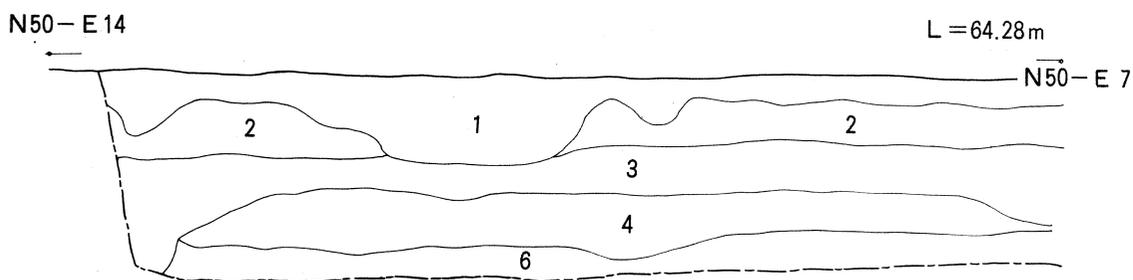
1	腐食土混合した黒褐色砂質粘土層
2	褐色砂質粘土層
3	赤味褐色砂質粘土層
4	黄味褐色砂質粘土層
5	試掘に依り攪乱された層
6	暗灰褐色砂質粘土層



第63図 第2調査区土層図



第64图 第3调查区土层图



1	灰褐色砂質粘土層
2	黃褐色砂質粘土層
3	褐色砂質粘土層
4	赤褐色砂質粘土層
5	黑褐色粘土層
6	暗黃褐色砂質粘土層

縁塚古墳群 II・III

発行日 平成4年3月31日

編集・発行 大野原町教育委員会

香川県三豊郡大野原町  
大字大野原1260-1

印刷 (有)明高速印刷